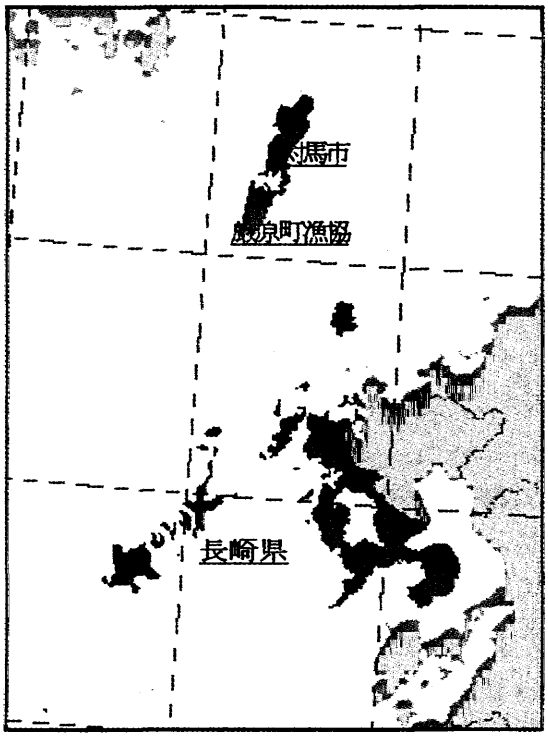
ワームベイト漁法について

厳原町漁業協同組合青壮年部
瀬 支部長　岸 川 達 也



１．地域の概要

対馬市は、長崎県の最北端に位置し、平成１６年３月に、旧厳原町、美津島町、豊玉町、峰町、上県町、上対馬町の６町が合併して誕生した人口約４万１千人余りの市である。

対馬は四方を海に囲まれ、リアス式海岸による天然の良港に恵まれた、東西１８キロメートル、南北８２キロメートルの細長い島である。また、対馬暖流により、ブリ、ヨコワ、イカ等の来遊量が多く、漁業は基幹産業として重要な位置にある。

厳原町漁協は、対馬市の南端に位置しており、正組合員３８２名、准組合員５２９名、年間の水揚げ金額は２１億円である。

２．漁業の概要

主な漁業種類は、ブリ釣り、ヨコワ曳縄、撒き落とし釣り等の一本釣りと、定置網漁業、採介藻漁業等で、海況や時期により、数種類の漁法を組み合わせて周年操業を行っている。

３．研究グループの組織と運営

厳原町漁協青壮年部は、漁業技術ならびに、水産に関する知識の向上、水産資源増殖の研究などを目的として、昭和４６年に発足し、７支部５１名が目標を持って活動している。

４．研究・実践活動取組課題選定の動機

ワームベイト漁法は、８年前に青壮年部が島根県大社町漁協で研修を受け、対馬に持ち帰り導入した漁法である。厳原地区で、ブリ釣り時期の１月から５月頃に沖合での潮待ち時間に行っていた、マダイのテンヤ一本釣り漁法に代わりうる有望な漁法として期待されたため、試験操業に取り組むこととなった。

５．研究・実践活動の状況及び成果

漁具は、ナイロン道糸に等間隔で市販されているワームベイトを装着した枝針を１０本付け、一番下におもりを付けた単純な構造である。

私たち青壮年部員は、この漁具を対馬の海況に適したものにするために、試行錯誤し、耐久性を上げるなど改良を行ったので紹介する。

〔状　況〕

（１）ワームベイトの色に関する取り組み

島根県での研修では、ワームベイトの着色方法は、材料にタマネギの茶色い皮を使い、この皮を煮出してワームベイトを黄色く着色したうえに、水玉状に色を付けるという方法であった。

私たちはさらに良い着色素材を探るため、「カレー粉」、「シソの葉」、「ミカンの皮」などで着色を試みた。しかし、どれもうまく着色せず、最終的に島根の研修で教えを受けた「タマネギの皮」による着色法が、簡単で色落ちもせず、しかも漁獲も上がるという事を改めて確認するに至った。

また、タマネギの皮で煮ることで黄色の着色の他に、ワームベイトに生き物のような独特なツヤが乗り、この色とツヤの相乗効果で魚の食いが良くなっているのではないかと考えている。

水玉状に色を付ける方法は、私たちの漁場では効果に差が見られなかったため、現在は行っていない。

さらに、導入当初は、工夫して１つの漁具に、濃淡の違うワームベイトを取り付けていたが、潮の濁り具合によっては、濃い色のワームベイトに魚の食いが偏り、かえって漁獲効率が落ちる事に気が付いた。そのため、漁具ごとのワームベイトの色の濃さは統一し、潮の濁り具合によって漁具自体を使い分けて操業するようにしている。

（２）漁具の耐久性向上に関する取り組み

ゴム製のワームベイトは、そのまま使うと釣り針の柄で穴が開き、すぐに抜けて使えなくなる。

研修先では、この対策として、ワームベイトを釣り針に通した後、上部を縛って抜けにくくし、その上に夜光ビーズを通す方法を採用していた。

しかし、この方法は、針一つひとつを細い糸で縛ることに非常に手間が掛かったため、この作業を省いて、同じ効果が得られる方法について検討した。

そして、ワームベイトを痛めない形の物を、針との間に噛ませれば良いのではないかと考え、ビーズ玉を使ってみたところ、耐久性が向上した。

ところが、この改良漁具も、使っているうちにどうしてもワームベイトの抜けが起こるため、その原因を突き止め、より耐久性を上げるべくさらに研究を行った。

抜けの原因を探った結果、魚がワームベイトをくわえ込んだ際に、魚の鋭い歯とかたいビーズの間にワームベイトのゴムが挟まれ、傷ついたゴムが裂けて抜けが起こる事が分かった。

この対策として、ワームベイトへのスレを緩和するために、釣り針とワームベイトの間

に噛ませていたビーズを、ソフトな物に入れかえて改良を行ったところ耐久性は大きく向上し、導入当初に比べ格段に使いやすい漁具となった。

以上の改良で、完成したワームベイト漁具を使い、操業を行った結果、従来行っていた漁法と比べ、予想以上に効率の良い操業ができる事が分かったので、次にその成果について説明する。

〔成　果〕

（１）操業作業量の軽減

このワームベイト漁法を導入する前は、マダイはテンヤ釣りで漁獲していた。

テンヤ釣りの難点は、漁具が軽く、風があると漁船を流して操業することが困難なため、パラアンカーを使用して、潮流に合わせて操業しなければならない事である。

また、テンヤ釣りは１つの漁具で魚は１匹しか釣れないので、１回の流しで操業効率を上げるには、同時に２つから最高６つくらいは漁具を下ろす必要がある。

さらに、餌の活きエビを付け替える作業も加わってくるため、操業中は船の上で常に作業に追われているような状態であった。

これに対しワームベイト漁法は、通常１００から２００匁（もんめ）のおもりとビシヨマを使うため、パラアンカー無しでも漁具が吹かれず、漁船の流れ方に左右されない操業が可能になった。

このため、漁具を海底まで下ろす作業が手早く行えるようになり、以前は操業を敬遠していた、魚群の集まる範囲が狭い小さな瀬も利用できるようになった。

さらに、１つの漁具に１０本ものワームベイトが付けられるので、いくつも漁具を下ろす必要も無く、餌の付け替え作業も無くなり、操業がとても楽になった。

（２）漁獲量の増加

年ごとに全体的な漁獲量の変動があるため、単純に比較できないが、現場では、「導入以前はタイ類を１０箱水揚げしていたが、この漁法導入後は、タイとイサキあわせて２０箱水揚げできるようになった。」との組合員の声からしても、この漁法が漁獲増加に貢献していることは明らかである。

（３）休息時間の増加

テンヤ釣りで使用する活きエビは、自家用エビ曳き網や、岸壁から網ですくうなどして確保していた。

エビ網では１日で数日分のエビを確保するが、夕方、水揚げを終えてから再び網を入れに行き、夜中までかけて活きエビを必要量確保しなければならない上、捕ったエビを活かすことにも神経を使わなければならなかった。

このような難儀なことから解放され、時間的に余裕を持てるようになったことは、この漁法を導入して強く感じている。

６．波及効果

この漁法で、私たちは、主にマダイとイサキを漁獲しているが、瀬に集まる魚であれば、ワームベイトの色や形状、サイズを変えるだけでアジやサバなども良く釣れ、多様な魚種に対応が可能な事も分かってきた。

このように試行錯誤し改良を重ねた結果、省力型で、低コスト型の漁法であることが実証され、安定した水揚げが図られるため、私たちにとって、なくてはならない漁法となった。そして、導入後数年で対馬全島にこの漁法が広まって行った。

しかし同時に問題点として、私たちの操業する対馬南部の漁場に、他地区から漁船が集まって操業するようになり、それまで３０隻程度の地元船が操業していたのが、多い日は３００隻以上もの漁船がひしめき合う状況も見られるようになった。

７．今後の課題や計画と問題点

このような状況から、解決していかなければならない課題も出てきた。

限られた漁場に多くの漁船が集中すると、資源へのダメージが大きくなるのは周知の事であるが、一本釣りは自由漁業であるため、漁船同士の調整は難しい。今後は、漁場の共同利用方法の検討の必要性も感じている。

青壮年部では「ワームベイト漁法」の他にも、「アジ・サバ漕ぎ釣り」、「サワラ曳き縄」、「ヒラメ曳き縄」等、新漁法の導入を展開しており、課題となっている、限られた漁場への漁船の集中が、多種多様な漁法の導入と漁場の開拓によって、解消される事を期待し、新漁法の視察研修を行っている。

しかし、現状として私たちの漁場でも、狭い場所に多くの漁船が集まったことにより、１隻当たりの漁獲量は減少し、今では１日５～１０箱程度にまで落ちている。

このような水揚げ量の減少と、魚価の低迷の課題を克服するため、私たちは次のような取り組みを行っている。

まず、釣り上げた魚について、活魚出荷か鮮魚出荷かをその場で見極め、状態が良いと判断すれば活魚出荷を行う。そして鮮魚出荷と判断した魚は、活力がある内にエラ〆（じめ）してから、しっかりと水氷で処理を行い出荷を行うということである。

このような作業を操業中に行えば、処理に時間が取られるが、大切なのは釣った魚１尾１尾を丁寧に扱うことで、「信用ある活魚」、「高品質の鮮魚」として高い評価を受ける事ができるということにあり、実際に私たちの魚は、市場で良い評価が定着し、高値で取引きされている。

魚を闇雲に漁獲するのではなく、獲った魚を大切にし、できるだけ高く売る努力をすることが、ひいては水産資源の永続的な利用と、収入も安定させる事になり、対馬水産業全体の発展につながると考えている。